発達特性のある学齢児の保護者による支援選択の経験と葛藤

Parents' Experiences and Dilemmas in Choosing Support Services for School-Aged Children with Neurodevelopmental Difficulties

○矢野 晴美[1]・大谷 多加志[2]

Harumi Yano・Takashi Otani

[1]京都光華大学大学院心理学研究科修士課程・[2]京都光華大学心理学科

[1]Master's Program, Graduate School of Psychology; [2]Department of Psychology, Kyoto Koka University

Key words：発達特性，支援選択，葛藤

目的

児童福祉サービスの契約制度のもとで、保護者は子どもに必要な支援を選択する立場にある。近年、支援事業所は増加傾向であるが、それが適切な比較・判断に基づく利用につながるとは限らない。西岡（2023）は、発達障害者の母親が専門家の言説を内面化し、選択を重ねることを通じて、子どもの結果への責任を担う構造を論じている。本研究では、発達特性のある学齢児の保護者が、支援の選択と利用後の見直しをどのように経験し、その選択や養育の結果をどのような責任として受け止めているかを検討し、援助への示唆を得ることを目的とした。

方法

発達特性のある学齢児を育てる母親10名に、子の診断の有無は問わず、2026年3～8月にインタビューガイドにそって面接を実施した（オンライン9名、対面1名）。説明・同意確認を除き77～107分、平均89分であった。支援選択の経緯、葛藤、制度・環境への認識、利用後の経過、責任感等について尋ねた。

録音から作成した逐語録をSCAT（大谷，2011）で協力者ごとに分析し、ストーリーラインと理論記述を作成した。その後、事例間の共通点・相違点と概念間の関係を検討した。誰について、どの支援場面で語られた内容かを区別し、逐語録と構成概念に戻って解釈と文脈の対応を確認した。

本研究は所属大学の倫理審査の承認を得て実施した。参加の任意性、録音、個人情報の保護等を説明し、オンラインでは口頭での同意をレコーディングで記録し、対面では署名により同意を得た。

結果

支援の必要性の認識には、専門職による追認に加え、保護者自身の気づきも関わっていた。支援を求める理由には、子どもの発達を促すこと、安全の確保、交流機会や居場所の確保、家族の生活の維持があった。

選択においては、情報の比較や子どもとの適合性を判断することの困難が示され、加えて、送迎・就労・受け入れ条件等も影響していた。専門職による選択肢の絞り込みや家庭事情を踏まえた提案が判断を支える一方、候補が示されても判断材料が不足する場合があった。また、選択肢が限られていても親子が納得する経過もみられた。

利用開始後は、本人の反応や意思、成長、進学、家庭生活の変化に応じ、支援の継続・調整・終了が検討されていた。相談や変更可能性が判断を支える一方、適合性の見極めや機関間の調整が負担となる場合があった。

支援の選択・調整を担うことが、結果責任を自身に帰属させることに直結はしていなかった。選択への納得や、当時の条件では最善だったという評価があっても、後悔や自身の対応への問い直しという相反する思いが併存する場合があった。保護者の努力や限界に対する第三者の承認が、責任や失敗の捉え直しに関わる経過もみられた。

考察

保護者の支援選択を理解するには、選択肢の有無に加え、比較・判断と実際の利用を可能にする条件を捉える必要がある。選択肢が限定的であることが必ずしも納得の欠如を意味しなかった。また、支援選択は一度の決定で完結せず、本人や家族の状況に応じて判断を更新する営みであり、利用後も相談と調整を支える関係が重要と考えられる。

責任については、西岡（2023）が論じた結果責任の引き受けに関わる経験とともに、全面的な自己責任化を否定する語りもみられた。納得と後悔も併存しており、後悔の存在だけで選択を否定的に評価しているとは判断できない。援助では、後悔の解消を一律に目指すのではなく、選択当時の条件や担えた範囲をともに確かめることが求められる。保護者の選択を尊重しながら、判断や調整を一人に集中させず、親自身と家族の生活を支える視点が重要である。

参考文献

西岡 知香（2023）発達障害者の母親に見るケア責任の変化―原因責任から結果責任へ―. Core Ethics, 19, 135-147.

大谷 尚（2011）SCAT: Steps for Coding and Theorization―明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法―. 感性工学，10（3），155-160.